



## 日本文化研究所 平成二十三年度事業計画① デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開

井上 順孝

本プロジェクトは、平成二十二年  
度から三年計画で発足し、本年度は、  
二年目にあたる。本プロジェクトの  
事業内容は大きく二つの柱からなっ  
ている。すなわちデジタル・ミュージ  
アム(DM)全体の運営と、本プ  
ロジェクト独自の調査・研究の展開、  
それに基づくデジタル・コンテンツ  
の拡充である。それぞれについて、  
本年度の計画を述べる。

一、デジタル・ミュージアムの運営  
デジタル・ミュージアムは、ミュー  
ズテークというシステムを導入して  
いる。他大学、博物館等でも利用さ  
れているデータ管理のソフトである。  
機構発足以来、基本的なシステム  
の構築のためにワーキンググループ  
を結成して、意見交換をおこない、  
ソフトウェアの改善などに努めてき  
た。また、実際にデータベースを構  
築し、内容の充実も図ってきた。地  
図情報はグーグルマップの利用を実  
現した。

基本的な設計は達成されたが、  
データベースを作りやすく、かつ  
ユーザーが利用しやすい環境にする  
ためには、まだまだ改善の余地があ  
る。そこで本年度は、細かな改善を  
一つ一つ実現していくことに力を  
置く。

さらに図書館を中心として、リポ  
ジトリの作成の案が検討されてい  
る。またすでに一部は実現してい  
るが、研究開発推進機構内部の研究成  
果のアーカイブを作成することを目  
指している。旧日本文化研究所の紀  
要は一号から百号まですべてデジタ  
ル化され、DVDとして配布してい  
るが、こうしたデジタル化を体系的  
に推進し、少なくとも機構関係の研  
究成果はすべてデジタル化して、広  
く国内外の教育・研究面での利用に  
供することができるようにする。

本年度はその準備作業、全体的構想  
を固める年とすることになっている。  
以上の業務を円滑に実施するた  
め、従来通り、各機関で選ばれた担

### 目次

◆ 日本文化研究所 平成二十三年度事業計画①	1
デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開 (井上順孝)	
◆ 日本文化研究所 平成二十三年度事業計画②	3
「国学院大学 国学研究プラットフォーム」の構築 (遠藤潤)	
◆ 学術資料館 平成二十三年度事業計画①	4
近代学術資産の資料化と地域連携活用に関する研究 (小川直之)	
◆ 学術資料館 平成二十三年度事業計画②	5
考古学資料館収蔵資料の再整理・修復・研究・公開 (内川隆志)	
◆ 学術資料館 平成二十三年度事業計画③	6
出雲地域における祭祀遺跡に関する学術調査 (加藤里美)	
◆ 学術資料館 平成二十三年度事業計画④	7
神道祭祀の資料論的研究と関連資料の整理分析 (加瀬直弥)	
◆ 校史・学術資産研究センター 平成二十三年度事業計画①	8
国学院大学における学術資産研究の発展と公開 (齊藤智朗)	
◆ 校史・学術資産研究センター 平成二十三年度事業計画②	9
国学院大学における大学アーカイブズと自校史教育の構築と展開 (齊藤智朗)	
◆ 研究開発推進センター 平成二十三年度事業計画	10
研究開発推進センター研究事業 (遠藤潤・菅浩)	
◆ 事業計画・人事一覧	12
◆ 彙報	14
◆ 資料紹介 三角縁波文帯三神三獣鏡	16

### 二、プロジェクト独自の研究とデジ タル・コンテンツの構築

① 収集している教派神道・神道  
系新宗教の資料整理とデジタル  
化、公開の開始

日本文化研究所ではこれまで長期  
にわたって、教派神道(神理教・神  
道修成派など)や神道系新宗教関係  
の基礎的文書資料を大量に収集して  
きた。その一部については、すでに  
翻刻されたり、内容が論文等で紹介  
されたりしているが、情報環境ならび  
に技術の進歩に合わせ、これらをデジ  
タル化する作業を進めてきている。

そのデジタル化作業自体はすでに大半が完了しており、これらの文書を画像データとして順次公開していくためのメタデータの整備をおこなう。

神道教関係資料のデータ公開を始め、神道修成派関係資料のデータ公開の準備を進める。

また、神道系教団より委託された教団基礎資料(書簡類約二万点)のデジタル化作業も継続して進める。ある程度の資料整理の見通しがついた時点で、資料内容の分析を開始する。

### ② 神道関係論文の双方向翻訳(日本語文献の外国語訳ならびに外国語文献の日本語訳)

前プロジェクトから継続して、毎年三〜四本程度の神道に関する論文を選定して双方向で翻訳し、ウェブ上で公開を進めてきた。すなわち日本語論文の外国語訳と、外国語論文の日本語訳である。二十二年度は、英語論文の日本語訳一本、日本語論文の英語訳二本をおこなった。

二十三年度も同様に継続する。英語論文の日本語訳ないし日本語論文の英訳作業が中心となるが、韓国語などそれ以外の言語との双方向翻訳も視野に入れる。比較的最近に刊行・発表された四本程度の論文を選定し、翻訳する。なお、対象とする論文の内容も、狭義の神道に関するものに限定するのではなく、広く日本文化に関わるもので翻訳・発信の意義が高いと思われるものを候補に含める方針である。

翻訳された論文は、現在PDFファイルで本研究所ウェブサイトで

り自由に閲覧できるようにしてある。これらの公開論文を容易に一覧でき、より多くの研究者らがアクセスできるよう、サイト構成の再検討も並行して進めていく予定である。

### ③ オンライン神道事典EOS(Encyclopedia of Shinto)の拡充

英文のオンライン神道事典であるEOSは、すでに二百五十万以上のアクセスがあり、広く世界に知られ利用されているコンテンツとなっている。その内容をさらに充実させるべく、本年度は以下のことを重点的に進めていく。

まず、すでにアップロードされている本文の内容をチェックし、改善していく作業の継続である。多くの翻訳者の協力によつて構築されたコンテンツであるため、全体的なチェックならびに統一性・整合性の確保を時間をかけておこなっていく。なければならない。

また、EOSには旧ヴァージョンと新ヴァージョンがあり、デジタル・ミュージアムのサイトにあるのは、後者となっている。しかし、後者には、音声再生など、旧ヴァージョンの機能を十分引き継いでいない部分が残されたままとなっているため、新旧を併存させている。問題点をすべて解決し、チェックが完了した段階で、完全な切り替えを実施したいと考えている。

次に、二十二年度より着手した年表部分の英文化を、継続して推進する。さらに、神道あるいは日本文化・日本宗教についてあまり詳しくない

外国人を対象とした入門用のサイトも、引き続きさらに充実させていく。現在のところ、境内図、社務所、神殿内部、年中行事、人生儀礼の概要などを示した計六点のオリジナルのイラスト・図が掲載されており、マウスのポインタを図内に合わせるとその名称と簡単な解説を知ることができるようになっていく。こうした形式による概説的内容を、外国人の入門者・サイト訪問者の目線を踏まえて、構築していく。

一部の章については、韓国語訳を継続して進めている。「第四部神社」については、翻訳が完了したため、公開方法を検討した上で、アップロードする。さらに、本年度は、「第八部流派・教団と人物」(計百十八頁程度)の翻訳を集中的に進める。

### ④ 宗教文化教育の充実のための教材作成

二十二年度は、科学研究費補助金基盤研究(A)「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」(研究代表者・星野英紀大正大学教授)の最終年度であったため、成果のまとめとなるシンポジウム・フォーラムの開催や報告書作成がなされた。

また平成二十三年一月九日には、「宗教文化士」資格の認定制度の運営を担う「宗教文化教育推進センター」(CERC, サーク)が本研究所内に設置された。本年度十一月に同認定試験の第一回がおこなわれるため、連携を強化していく。

本年度は、前記科研を継承する内

容であり、本プロジェクト代表者である井上順孝を研究代表者とする科学研究費補助金基盤研究(B)「宗教文化教育の教材に関する総合研究」が採択された。この科研による研究は、二十三〜二十六年度の四年間にわたって実施されるものであり、本プロジェクトと連携して教材開発を進める。

具体的には、宗教文化の学習に役立つ博物館や映画、世界遺産、参考文献に関するデータベースやオンライン教材の作成・発信に関わる調査・研究などを実施する。また本年度は特に、「動画」教材の開発に重点的に取り組む。

### ⑤ 国際研究フォーラムの開催

本プロジェクトでは毎年少なくとも一回は、本研究所の主催で、本プロジェクトと密接に関連する内容の国際研究フォーラムを開催している。

本年度は十月十六日、宗教文化教育における動画利用をテーマとして、国内外から専門研究者を招いての会議・セッションを予定している。このテーマは事業④と関連づけられた内容を企画しており、実践例の紹介や意見交換を通じて、教材開発を推進しようというものである。

なお、二十二年度に「宗教と社会」学会・宗教意識調査プロジェクトと合同で実施した「第十回学生宗教意識調査」の結果が、報告書として本年二月に刊行されたことを付記しておきたい。

## 日本文化研究所 平成二十三年度事業計画②

## 「國學院大學 国学研究プラットフォーム」の構築

遠藤 潤

日本文化研究所では、平成二十二年度まで三カ年にわたって、研究事業「近世国学の霊魂観をめぐるテキストと実践の研究―霊祭・霊社・神葬祭―」(研究代表者 松本久史)を遂行し、死生観や死に関わる諸儀

礼(葬儀、霊祭など)について、実証的な方法で明らかにしてきた。すなわち、テキストの内容分析、テキストの成立、流通などを含めた、当該テキストの社会的文脈の把握、地域の神職や国学者らによる葬儀・霊祭など社会的実践の実証的理解と、そこでのテキストの用い方や関係する情報の共有のあり方などの分析を通して、近世国学の霊や死後をめぐる思想と実践のトータルな理解を進めてきた。この事業では、『霊能真柱』の精説がおこなわれるとともに、鈴門・気吹舎をはじめとする各地の国学者たちによる霊魂をめぐる実践の様相が明らかになった。

本年度から始まる『國學院大學 国学研究プラットフォーム』の構築では、右の研究事業の成果、とりわけ国学のテキストの分析や地域の国学者の実態解明の成果に立脚しつつ、国学に関する基礎的研究を進め、学内でさまざまにおこなわれている国学研究のプラットフォームを構築し、ひいては学外との研究交流

の基点たらしめようとするものである。つぎのような内容を実施する。

## 三カ年の研究計画

## I 国学研究の基礎データ構築

(1) 『古史伝』版本のデジタル化とそれにもとづく研究

デジタルデータをデジタル・ミュージアムで適切な形態で公開するとともに、精説のための研究会を開催し、テキストについての基礎的な研究を進める。

## (2) 国学者の地域拠点の研究

幕藩制下の神社政策の把握、藩と国学者の関係についての研究、門人組織の把握(大平門、気吹舎、神習舎など)、地域組織の把握(地域リーダーの把握とともに)などをおこなう。得られた成果については、国学関連人物データベース(研究開発推進センター)へフィードバックする。

## II 国学に関する研究連携のための組織づくり

「国学研究会」を運営し、学内(学部・大学院)の国学関係研究プロジェクト・研究者の参加を呼びかけ、異

なるプロジェクト間での研究関係情報共有をおこなう。

これらによって、国学研究に関する基礎情報を共有できるかたちで蓄積する方法を模索するとともに、学内のさまざまな国学研究のあいだの連携を可能にする。将来的には学外の国学者者にとつての研究交流の場としての役割を果たすことを目指す。

## 今年度の研究計画

平成二十三年度は、以下の各事業をおこなう。

## I 国学研究の基礎データ構築

(1) 『古史伝』版本のデジタル化とそれにもとづく研究

『古史伝』版本のデジタルデータを作成するとともに、読解を進める。研究会にあたっては、『古史伝』草稿本などを参照しながら、版本の形態になる以前の加筆や訂正などの編集作業についても配慮しつつ、読解を進める。研究会の成果については、記録のかたちで蓄積をし、公開にふさわしい内容については、デジタル・ミュージアムでの本文に付加できる注釈の形へと編集する。

## (2) 国学者の地域拠点の研究

各藩の神社政策、藩と国学者の関係について調査・分析をおこなう。準備作業としては、辞事典や年表を

はじめ関係する先行研究を参照しつつ、メンバー内で幕藩体制下の神社政策を把握するために必要な理解の共有をはかる。

各藩の神社政策に関しても、自治体史による成果や主題的に論じた論文などについての調査をおこない、個別研究の前提とする。

藩と国学者の関係について、本年度は加賀藩・紀州藩を中心的な対象として、その研究の今後の可能性を含めて調査・研究する。また、門人組織については、各種門人帳や先行研究にもとづき、気吹舎や大平門について門人組織を把握する。

## II 国学に関する研究連携のための組織づくり

学内のさまざまな国学研究プロジェクト間での研究関係情報の共有をめざして「国学研究会」を開始する。また、成果についてはウェブをはじめさまざまな方法により学外への周知をはかる。

二年目以降は、テキストに関する読書会を継続的におこなって注釈などを蓄積するとともに、国学者の地域拠点については、他の藩についての調査もおこなう。国学研究会も継続的に開催するとともに、最終年度にはシンポジウムの開催なども想定している。

## 学術資料館 平成二十三年度事業計画① 近代学術資産の資料化と地域連携活用に関する研究

小川直之

### 研究の目的

國學院大學は建学以来まもなく一三〇周年を迎えようとしている。明治十五年の皇典講究所開設は、まさに文明開化が本格化し、各地に波及しようとしている時代だった。こうした中で日本の国史、国文、国法の研究と教授を基幹とする研究・教育機関が設立されたのであり、以来、本学では多様な人文学資料が蓄積、活用されてきた。さまざまな学術資料がある中で、本プロジェクトの基になっているのは、平成十一年度から十七年度まで文部科学省・私立大学学術研究高度化推進事業の学術フロントティア推進事業に採択された「劣化画像の再生活用と資料化に関する基礎的研究」である。

これは標題からもうかがえるように、画像資料の研究であり、大場磐雄博士、折口信夫博士、柴田常恵などによる写真資料を中心に進めた。この研究プロジェクトは、その後、日本文化研究所の「デジタル・ミュージアムの構築と展開」のサブ・プロジェクト、さらに平成二十年年度から二十二年度までは学術資料館の「近代学術資産のデジタル化・データベース化による再生活用の研究」に引き継がれ、二十三年度から二十五年年度までの三年間は標記の「近代学術資産の資料化と地域連携活用に関する研究」へ展開させることとなった。

ここでいう「近代学術資産」というのは、日本の近代において学術資料として収集・保存されてきた諸資料で、これを基にさらに今後幅広く学術などの分野において活用が可能なものということである。幅広い活用をおこなうためには、これらがつ情報を整備して公開をおこなう資料化の作業が必須である。今年度からは、これをおこなった上で、活用を進めるための地域連携活動をおこなうことを目的にしている。

具体的には、我が国の文化財保護の基礎を築いた柴田常恵が収集した瓦拓本資料や調査記録、神道学・宗教学者であった宮地直一博士が収集した神社社葉書を対象とする。

これらについて一点ずつデジタル化や情報整備などをおこなうことで学術資料としての要件を整え、さらに資料とつながりがある自治体や組織と連携して展示や公開などによる活用を試行し、今後の本学と自治体・学外組織との連携活動の可能性を探っていく。

### 柴田常恵資料

柴田資料については、今までに『柴田常恵写真資料目録』Ⅰ・Ⅱ、『柴田常恵拓本資料目録』を刊行し、写真資料は本学デジタル・ミュージアムでも公開してきた。しかし、まだ資料化が進んでいないものがあり、二十三年度

からは①瓦拓本資料二七六三三のデジタル化、②考古学資料館所蔵の柴田常恵資料の整理、③柴田常恵の調査記録(野帳)の整理をおこなっていく。

柴田の瓦拓本資料は本学の考古学研究室によって従来から整理がおこなわれてきた。これのデジタル化が一つの作業であるが、この中の、たとえば武蔵国分寺瓦の拓本資料には従来知られていないものも含まれている。柴田資料には史蹟名勝天然記念物保存法施行によって指定を受けた史蹟資料が多く含まれているのであり、デジタル化することで研究促進をはかることができる。そして、より積極的に、当該資料と関連をもつ自治体との連携によって展示などをおこない、資料存在の周知を進めることを計画している。

また、すでに目録として刊行した写真資料や拓本資料について、柴田自身が残した調査記録(野帳)を整理し、この記録情報と写真資料・拓本資料の関係を明確にしていく。写真や拓本などのすべてについて、的確な記録が残されているわけではないが、調査記録にはスケッチ、メモもあり、野帳内容の索引を作成することで検索が可能になることを目標としている。すでに昨年度までの研究で拓本の目録化は終わっており、拓本資料中には現在、実物が失われているものもあって、重要な地域資料と位置づけられるものも出てくる可能性がある。

### 宮地直一神社社葉書資料

宮地直一博士による神社社葉書のデジタル化は、平成二十年年度からの「近代学術資産のデジタル化・デー

タデータベース化による再生活用の研究」でもおこなってきた。現時点までに西日本分のデジタル化とデータベース化が完了しているのので、二十三年度からは東日本分についてのデジタル化とデータベース化を進める。

明治後期から発行が始まる絵葉書については、近年急速に研究が進み、画像を含むデータベースの公開も始まっている。今や絵葉書は、重要な歴史等の資料としての認識が深まっているといえる。それは、絵葉書は現在は観光目的に作成されているが、近代においては写真ニュースとして、画像学術資料としてなど、多様な目的をもって発行されていたからである。

宮地収集による神社社葉書にも、その発行にはいくつかの目的が託されていたようだが、宮地は各神社の現況資料として収集していたと思われる。現在の姿をかたわらに置きながら歴史的な研究を進めたと考えられるが、現在ではこの絵葉書はそれぞれの神社に関する歴史資料と位置づけられる。絵葉書の画像は、文字記録や伝承資料とは別の側面を教えてくれるのである。

今次の研究では、絵葉書として発行されている神社などの連携もおこなないながら、その有効活用のお道を探っていく予定である。また、二十五年年度までには目録の刊行もおこない、より幅広い活用が可能となることを目指したい。整理が完了した際には、国内屈指の絵葉書コレクションとなることは間違いない。

## 学術資料館 平成二十三年度事業計画② 考古学資料館収蔵資料の再整理・修復・研究・公開

内川 隆志

### 平成二十三年度事業計画

考古学資料館では約十万点に及ぶ資料が収蔵されており、その多くは設置から八十年以上を経過する中で、購入・寄贈・調査等によって収集したものである。これらの中には、管理上の問題や、数度にわたる移動によって混乱をきたし、再整理が必要となつてきているものがある。また、経年劣化によって再修理が必要な資料も多くあり、それらの再整理と修復、公開をおこなう。既に平成二十年から推進しているが、二十三年度以降も継続して整理作業を実施、同時に資料研究を推進し、公開に結びつけるものである。

収蔵資料の多岐に互る活用の際し、再整理と修復は必要不可欠な作業であり、資料の保存と活用に応えることを可能とし、資料館の機能を果たすために継続して実施する必要がある。また、再整理することによって全収蔵資料の内容把握が可能となるだけでなく、伝統文化リサーチセンター資料館での展示や資料活用などに対応する事ができる。具体的には、劣化資料の修復作業、収蔵資料の詳細把握、情報整理によるドキュメンテーション化事業、個別資料の研究活動である。これまでにコレクションの整理・目録作成では、各種要覧

『考古学資料館図録Ⅰ・Ⅱ』『服部和彦氏寄贈資料図録Ⅰ・Ⅲ』として刊行した実績がある。本事業では今後も資料整理を継続し、中期計画として収蔵資料の総目録化、データベースの構築を目指すものである。

これらの資料化から研究、成果発表にいたる過程において、学部・大学院学生を事業補助として雇用し、博物館における資料整理実務をおこなう。これはまさに研究と教育の連携であり当該専攻分野の学生にとって得るものは多大である。

さらに平成二十三年度より整理・修復作業と並行して収蔵資料の研究と展示資料製作を加え、研究成果の学部・大学院教育への反映を視野にいたれた資料館の実質的な資質向上を目指すものである。

館蔵資料の総点検実施後、資料全体の整理・研究を推進する。既往の管理台帳を修正し実際の資料との関連を洗い出し、新たな管理台帳を作成するための基礎固めをおこなう。その際に、著しく汚損している資料についても、これまで同様、資料の素材に適した洗浄、乾燥、注記作業等をおこなう。たまプラーザキャンパス収蔵庫に保管している民俗(族)資料群についても、その内容把握をおこない整理する予定である。また、

竹岡俊樹博士寄贈旧石器資料などの未報告分については、随時整理作業を実施する。また祭祀関連資料について、整理・研究・報告を実施。展示資料の製作として、既に整えてある展示具の製作を集中的におこない公開系コンテンツの充実を図る。平行して修復環境整備、展示技術開発、展示コンテンツの整備を実施し、展示に反映させる。

i 館蔵資料整理と特定考古資料群の研究(先史) 寄贈旧石器資料の整理・その他整理・研究  
ii 館蔵資料整理と特定考古資料群の研究(有史) 祭祀関連遺跡の整理・研究

iii 館蔵民俗(族)資料群の整理と研究 種別・実数確認  
iv 館蔵資料の保存・修復環境整備・展示技術開発 展示コンテンツの整備

### 平成二十二年度事業報告

#### ○収蔵庫再整理

収蔵庫内における資料の配置状態を確認し、現行の館蔵品台帳と館蔵品番号について、悉皆的な再確認を進めた。館蔵品番号を持つ関係資料の約半数弱(二千点)を抽出。

・館蔵資料(遺跡単位保管資料・個人コレクション・その他)・寄託資料・作業中資料の管理・出納システムについて検討を進めた結果、平成二十三年度以降の仮運用に対応し得るデータの蓄積がなかった。

#### ○大形石棒プロジェクト

・谷口康浩(兼任教授)を中心に、実館蔵大形石棒十六点について、実

測・写真撮影等の資料化をおこない、東日本から出土した石棒三〇四九点(八三七遺跡)について、報告事例の収集・記録を実施した。

・シンポジウム「縄文人の石神―大形石棒にみる祭祀行為―」を実施。  
・研究報告『縄文時代の「大形石棒」東日本地域の資料収集と基礎研究』を刊行。

#### ○研究成果

##### ・図書

大形石棒プロジェクトチーム(代表谷口康浩)『縄文時代の「大形石棒」東日本地域の資料収集と基礎研究』「考古学資料館収蔵資料の再整理・修復および基礎研究・公開」研究報告、國學院大學研究開発推進機構学術資料館、平成二十三年

##### ・論文(報告・資料紹介)

「國學院大學学術資料館所蔵考古資料調査報告 埼玉県さいたま市真福寺貝塚出土資料」二〇一一『考古学資料館紀要』第二十七輯 國學院大學研究開発推進機構学術資料館考古学資料館部門

・柳田康雄・内川隆志・深澤太郎

二〇一一「出土地不明 伝大槻盤 溪旧蔵 三角縁波文帯三神三獸鏡」『考古学資料館紀要』第二十七輯

國學院大學研究開発推進機構学術資料館考古学資料館部門

・シンポジウム、フォーラム

「縄文人の石神―大形石棒にみる祭祀行為―」平成二十二年十月九日、國學院大學渋谷キャンパス二二〇周年一号館一〇一教室

## 学術資料館 平成二十三年度事業計画③ 出雲地域における祭祀遺跡に関する学術調査

加藤 里美

### 研究の目的

学術資料館(考古学資料館部門)ではこれまでの祭祀遺跡研究を継承し、「出雲地域における祭祀遺跡に関する学術調査」として日本古来の祭祀形態を有する出雲地域における磐座を中心とした祭祀遺跡とそこから出土した遺物を対象として調査をおこなっている。本プロジェクトは、出雲ひいては我が国固有の祭祀形態とその特質を解明することを目的として、鳥根県教育委員会と共同で二十一年度より三カ年にわたって実施しており、本年度で最終年度を迎える。

### 研究概要と既往の成果

調査対象は、鳥根県飯南町頓原所在の琴引山山頂遺跡、磐座等を中心としており、平成二十一年六月には当プロジェクトと鳥根県教育委員会、飯南町教育委員会、琴引山山頂に鎮座する琴弾山神社影山健宮司(由



琴弾山神社(右上)と発掘調査地(左下)

頂部の発掘調査を受けて昨年度調査の成果を受けて、琴引山山頂部の発掘調査を実施した。発掘は、琴弾山神社の鎮座する夫婦岩脇の比較的平坦な部分にトレンチ(○・八×五m二ヶ所)を設定し、上面より慎重に手作業で掘り進めた。遺物は、トレンチ含土より江戸時代後期の伊万里磁器片が検出された。遺構は確認できなかった。ただし、江戸後期頃の大掛かりな地形変化をおこなった痕跡が確認された。

来八幡宮宮司)とのあいだで事前協議を持ち、今後の計画と平成二十一年度の具体的な調査内容について打合せ、平成二十二年八月三十日から九月九日にかけて実地踏査をおこなった(調査参加者:松本岩雄・西尾克巳・椿真治・柳浦俊一・平石充・錦田剛志・石飛幹祐・吉田恵二・笹生衛・内川隆志・加瀬直弥・加藤里美・深澤太郎・新原佑典・小西沙和・江戸邦之・熊倉文子・田島太良・平野哲也・鈴木孝規)

### ①山頂部発掘調査

調査の対象地は、主として昨年度確認調査の成果を受けて、

### ②琴引山周辺の民俗調査

昨年に引き続き、琴引山周辺の民俗調査を実施した。主として、琴引山と生活、信仰、祭など、周辺住民と山とのかわりについて調査を実施し、情報を得た。これらについては大学にて情報の整理を開始した。

### ③神道関連の調査

飯南町生涯学習センターでの収集文献等により、琴引山で祀られる祭神説など、近世以前の神社の実態に関する調査をおこなった。これにより、神社祭神についての諸説を連続的に把握することが困難であることを確認することができた。

### ④資料の収集

調査と関連して、巨石信仰にまつわる伝承の収集と琴引山に関連する文献リストの作成をおこない、ほぼ完成した。

### ⑤講演会

当プロジェクトの関連事業として、講演会を実施した。「琴引山と神・人・祭り」平成二十二年九月五日(日)飯南町頓原ふれあいホールみせん午後十三時より 参加者二百名 趣旨説明・内川隆志 講演・景山 健(由來八幡宮・琴弾山神社宮司)「琴引山の伝説あれこれ」錦田剛志(鳥根県神社庁研修所講師・万九千神社禰宜)「古代出雲の岩石と神まつり」吉田恵二(國學院大學教授・学術資料館館長)「琴引山学術調査について」



発掘調査

主催:國學院大學 共催:鳥根県教育委員会・飯南町教育委員会  
平成二十三年度の計画

平成二十一年・二十二年度の研究・調査成果と抽出された問題点について、琴弾山神社境内にて発掘調査を実施し、山や磐座における信仰形態の一端を探る。また、磐座に関する情報の収集と琴引山を中心とした民俗調査と関連する史料における検討を進め、山と磐座、伝承地における信仰の形態を明らかにする計画である。さらに、前年度に引き続き磐座の基本的属性を主とした全国磐座データベースを作成し事業終了後にウェブサイトに公表する。本事業での研究成果は、平成二十四年度に『琴引山学術調査報告書(仮)』として刊行する予定である。

## 学術資料館 平成二十三年度事業計画④ 神道祭祀の資料論的研究と関連資料の整理分析

加瀬直弥

### 研究の目的

日本文化の基層をなす神道の教育研究につとめることは、神道精神を建学の精神に置く本学においてはとりわけ重要なことといえよう。学術資料館神道資料館部門は、そうした神道の教育研究に資するための資料を収集、展示、公開及び研究するための組織と位置づけられているが、従来の事業の成果を活かしつつ、さらなる研究の発展を期すため、今般、ここで紹介する事業「神道祭祀の資料論的研究と関連資料の整理分析」(以下、「本事業」)を新たに実施することとなった。

本事業は、平成二十年度から二十二年程度まで実施してきた事業「神道資料の整理公開と学術的価値の探求」(以下、「前事業」)を継承するものである。前事業はその名の通り、神道資料館部門所蔵の神道関係資料の整理をその基礎とし、公開の必要性のある資料については、國學院大學院友神職会東京支部等の支援を受けつつ、インターネット上、あるいは伝統文化リサーチセンターの活動に即した展示により公開した。また、神道研究のための基礎となるような資料に関する情報を蓄積することもおこなった。御神木に関する調査について神社本庁と共同で実施したり、

高野山別格本山正智院の典籍・文書等の調査等を実施したことはその一例である。これらの活動を神道文化学部教育等にも還元するなど、一定の成果をあげることができた。

本事業は、こうした前事業の成果を踏まえ、本部门自らが、神道研究の現状を把握し、その上で神道関連の資料から特質を明らかにすること、さらにそれを教育活動に還元することを念頭に置いて策定し、この平成二十三年度より実施する運びとなった。

本事業の流れとしては、前事業と同様、神道資料館部門等の所蔵資料の整理と基礎的分析を実施するとともに、神道祭祀に焦点を当て、その具体的な所作などを明らかにするための研究活動をおこなうことを目的とする。あくまで現段階での計画であるが、その柱として想定しているのは、次のようなものである。

### 古代神道史の複合的研究

神道祭祀と一口にいつても、その研究方法としては、さまざまな手法が想定される。そこで、時代をある程度分けることで、研究の焦点を絞り込む必要があるが、その中でも、古代の神道祭祀に関する復元的研究については、その計画の中核として

位置づけられるものである。

いわゆる古代の神道研究は、その政治的側面が専ら注目され、祭祀の形態に関するものは従来それほどおこなわれてこなかった分野である。しかしながら、近年の考古遺物の検討などにより、その実像が浮き彫りになりつつある。このような研究の現状を整理し、古代を中心とする祭祀の具体的な姿を復元することを目指す。より具体的にいえば、祭祀の場や用いられた道具などを確認できる文献史料と、考古資料などとの整合性に留意しながら、神社祭祀と関連性を持つと見られる祭祀遺跡のいわゆる景観を把握したり、卜占等、祭具の歴史が見通せる史料の確認をすることである。

### 祭祀の実施に関する基礎的分析

神社などでおこなわれる祭祀は、一見一貫した流れとなっている場合でも、多人数が関わること等により、詳細に見ると非常に複雑な姿を有していることがある。このような祭祀の姿を把握することで、神道の発展過程を明らかにする。さらにこの成果を、本部门が所蔵する神社祭祀に関連する絵画資料の学術的意義を検討するための参考とする。

### 神社と自然環境に関する研究

これまでの神社本庁との共同事業において、御神木の調査の集積等をおこなってきたが、さらにこれを分析することで、神社の植生に関する現状を把握し、その背景にある宗教

的、文化的特質を理解することを旨とする。

神仏関係資料の所在や内容に関する情報の収集

本部门をはじめ、本学にはさまざまな神仏関係等の史料がある。こうした資料を把握し、かつ学外資料との対応関係を整理することで、学内の当該領域の研究活動に供するため、前事業で実施した調査等の活動を継続する。

以上のような活動を推進することで、神道研究をおこなう内外の研究者の活動を支援するための拠点となることを目指し、かつ本学神道文化学部設置の演習科目や専門領域科目の授業で活用できるようにすることが、これから三年間の目標である。



新収資料 那智之図 (橋本観吉氏寄贈)

校史・学術資産研究センター 平成二十三年度事業計画①  
**國學院大學における学術資産研究の発展と公開**

齊藤 智朗

事業の目的

本事業は、本学図書館（以下、図書館）と協働して、図書館所蔵の貴重書をはじめとする学術資産を研究し、その成果を図書館のウェブサイトに上におけるデジタルライブラリーで公開した、平成二十年度から二十二年度にかけての「國學院大學の学術資産の研究と公開」研究事業を継続するとともに、さらに貴重書等に関する目録の編纂をおこなうものである。また本学の学部教員で構成される本センターの兼任教員による、客員研究員やポストドク研究員、研究補助員、およびアルバイトの大学院生等への指導を通じて、本機構が取り組むべき課題の一つである若手研究者の育成を強化することも目指す。

事業概要と既往の成果

本事業は、二つの作業を並行しておこなうものであり、まずは「國學院大學の学術資産の研究と公開」研究事業を継続して、既存のデジタルライブラリーに掲載されている資料の研究をもとに解説を付す「補充」と、学術的な価値の高い資料をデジタルライブラリーへ新たに掲載する「追加」の作業である。このデジタルライブラリー掲載資料の「補充」



『國學院大學 校史・学術資産研究』第3号

「追加」作業は、本事業の代表者（本センター長）を中心に、兼任教員が掲載資料の選定や、当該資料の解説執筆者の指定をおこなう。

また、もう一つの作業として、図書館所蔵の貴重書等に関する目録の編纂をおこなう。具体的には、日本文学関係として中世散文文学解題目録と、日本史学関係として中近世史書書誌目録を予定しており、平成二十五年度の完成を目指す。これら両作業を通じて、兼任教員は、兼任研究員ならびに大学院生等に研究指導を行い、若手研究者の育成を図る。

昨年度（平成二十二年度）は、図書館と協働して、「補充」作業が十五点、「追加」作業が四点の、計十九点の資料に関する解説や書誌、写真データを公開した（別表参照）。なお、解説等の執筆には、他機関の研究者や本学の文学専攻の大学院生による助力・協力も得た。

本学の学術資産に関する研究論考としては、本センターの機関誌である『國學院大學校史・学術資産研究』第三号（平成二十三年三月刊）に、針本正行・山本岳史「國學院大學図書館所蔵『呉越絵』の解題と翻刻」、宮原一郎「近世前期の富士村山修験と野論争論」、千々和到・北爪寛之・熊谷博史「國學院大學図書館所蔵『森田清太郎旧藏醍醐寺地藏院等文

書』、畠山大二郎「國學院大學図書館蔵伝楠木正虎筆『金葉和歌集』の解題と翻刻」、荒木優也「伝慈円筆『千五百番歌合』恋二零本について」、堀越祐一「八代国治旧蔵史料」について―中世文書を中心に―の六本の論文ないし資料翻刻・紹介を掲載した。

平成二十三年度の計画  
 今年度は、デジタルライブラリー掲載の典籍・資料の「補充」・「追加」の作業と合わせて、貴重書等に関する目録の編纂に着手する。また、これら作業を通じて得た新たな知見は、本センターの機関誌等で発表する。

【補充】

	カテゴリー	書名	図書番号
1	2. 奈良絵本・絵巻物関係	木曾物語絵巻	貴 3853-3854
2	2. 奈良絵本・絵巻物関係	酒吞童子絵巻	貴 2209
3	2. 奈良絵本・絵巻物関係	大織冠	貴 1917-1918
4	5. その他の勅撰集類	金葉和歌集	貴 3196
5	5. その他の勅撰集類	千載和歌集	貴 2635-2636
6	10. 平家物語	平家物語	貴 888-899
7	10. 平家物語	平家物語	貴 929-935
8	10. 平家物語	平家物語	貴 1285-1296
9	10. 平家物語	平家物語	貴 2304-2315
10	10. 平家物語	平家物語	貴 3173-3184
11	11. 軍記物語関係	太平記	091.2 / 913.47 / 1
12	11. 軍記物語関係	太平記	貴 1892-1907
13	11. 軍記物語関係	太平記	貴 2648-2675
14	11. 軍記物語関係	平治物語	貴 1221-1223
15	11. 軍記物語関係	平治物語	貴 2983

【追加】

	カテゴリー	書名	図書番号
1	2. 奈良絵本・絵巻物関係	恋塚物語屏風	貴 4193
2	5. その他の勅撰集類	新勅撰和歌集	貴 3649-3650
3	6. 私家集・類題集・歌合関係	千五百番歌合	貴 1127
4	11. 軍記物語関係	源平盛衰記	貴 863-887

平成22年度デジタルライブラリー解説  
 補充分・追加分一覧

## 校史・学術資産研究センター 平成二十三年度事業計画② 國學院大學における大学アーカイヴズと

### 自校史教育の構築と展開

齊藤 智朗

#### 事業の目的

本事業は、平成二十年度より三年にわたり展開した「國學院大學における大学アーカイヴズ体制の構築」研究事業を基本的に継続するとともに、特に本学における自校史教育の基盤形成に重点を置くものである。具体的に、本事業は学内の関係機関・部署と連携・協働して、本学の自校史教育用の教材の作成や、自校史への理解度及び当該教材に関するアンケートの実施と報告書の作成等をおこない、本学の学部教育やFD (Faculty Development) 活動の上で活用していくことを目的とする。

#### 事業概要と既往の成果

本事業は、従来の校史資料の収集や保存、また校史の研究を通じて得た成果を公開していくとともに、学内の関係機関・部署と連携・協働して、自校史教育に関連する作業の積極的な展開を図るものである。具体的には教養総合「神道科目」における自校史教育用テキストや、当該テキストに関するアンケート及び報告書等の作成をおこなう。

本センターでは、平成二十年度に本学神道文化学部及び教学事務部教

務課との連携により、教養総合「神道科目」において共通でおこなう「皇

典研究所・國學院創立の経緯と建学の精神Ⅰ・Ⅱ」のサブテキスト『建学の精神と國學院大學の歩み―渋谷移転まで―』を作成し、翌二十一年度には、神道文化学部及び教育開発推進機構共通教育センターと協働して改訂版を作成した。また、同年度より当該サブテキストに関する学生へのアンケートも合わせて実施しており、昨年度(平成二十二年度)は、計一、三三五通(前期九五四通、後期三八一通)のアンケート用紙を回収して、集計をおこなった。これらアンケートの結果を踏まえつつ、前年度と同様に、平成二十三年度用の当該サブテキストの改訂版を作成した。

このほか、校史資料の整理保存作業のうち、写真資料に関しては、本学図書館が所蔵する戦前の卒業アルバムやデジタル化による当該資料の保存とデータ収集を完了した。また、校史関連文献の整理・収集や、自校史に関する外部からの問い合わせへの対応を日常的におこなった。

本センター共催のシンポジウムとして、教育開発推進機構主催の「建学の精神」の過去・現在・未来―私

立大学の個性輝く教育とは―」を平成二十三年二月十八日(金)に開催した。本センターでは、当該シンポジウム終了後の本学伝統文化リサーチセンター資料館「國學院の学術資産に見るモノと心」研究成果公開スピーク見学会における解説をおこなった。

本事業における教員・研究員による研究成果としては、本センターの機関誌である『國學院大學校史・学術資産研究』第三号(平成二十三年三月刊)に宮部香織「宮西惟助の『日本制度通』講義―河野省三の講義筆記ノートを通じて―」、『國學院大學紀要』第四九卷(同年二月刊)に同「井上頼圀述「神祇令講義」と田邊勝哉講述「神祇令義解講義」について」を掲載した。加えて、校史資料を活用した研究として、『國學院大

學校史・学術資産研究』第三号所載の藤田大誠「大阪府皇典講究分所から財団法人大阪國學院へ」、および明治大学史資料センター発行の『大学史資料センター報告 大学史活動』第三二号(平成二十二年十二月刊)に、齊藤智朗「松野勇雄と皇典講究所・國學院大學」を寄稿した。また、旧校史資料課による刊行事業を引き継ぎ、本学の歴史や所縁のある人物にまつわる記事やエピソード等をまとめたパンフレット『校史』第二一号(平成二十三年三月刊)を編集・刊行した。

#### 平成二十三年度の計画

平成二十三年度は学内関係機関・部署と協議し、改めて自校史教育用テキストやアンケート項目の内容について検討する。



『校史』第21号

## 研究開発推進センター 平成二十二年度事業計画 研究開発推進センター研究事業

遠藤 潤  
菅 浩二

研究開発推進センターは、國學院大學二十一世紀研究教育計画委員会によって策定される研究教育事業の推進を図り、その成果をもって社会貢献を果たすことを目的としている。

本年度は、二十一世紀COEプログラム「神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成」における研究事業を継承し、建学の精神である神道の研究をさらに発展させる「研究開発推進センター研究事業」、およびこれまで二つの研究事業として遂行していた「日本発 共存社会モデル構築による世界貢献(共存学)」プロジェクトと「渋谷学」プロジェクトをもとに本年度から二十一世紀研究教育計画委員会研究事業として始動する「地域・渋谷から発信する共存社会の構築」プロジェクトを遂行する。

### センター研究事業

「研究開発推進センター研究事業」の特色は、これまで本学で培ってきた国学的研究、すなわち精緻な文献等資料の考証に裏打ちされた総合的な日本文化学を目指すところにある。具体的には、直接的に事業に携わる個々の研究者の専門的見地か

ら、神仏関係についての資料調査とそれに基づく実証的研究、国学者と神道に関する研究、「慰霊と追悼」を中心とした日本人の靈魂観の研究を進め、可能な限り多角かつ実証的に神道の歴史的展開を把握し、神道・日本文化の本質を解明する。

(1) 神仏関係についての資料調査とそれに基づく実証的研究

古代から現代にいたる神仏関係を焦点として、関係資料の調査・収集・保存(デジタル化を含む)と研究をおこなう。旧日本文化研究所をはじめとする学内機関所蔵の神道関係資料の調査をおこなうとともに、これまでセンター事業で調査・収集してきた資料を前提とし、研究事業メンバーが神仏関係に関する具体的テーマをそれぞれ設定し、本事業に関して必要な資料についてデジタル撮影やマイクログラフ、また活字資料の複写などによって収集を進める。その上で、各時代の神仏関係の特色を示す現象をとらえて研究し、『研究開発推進センター研究紀要』などに成果を発表する。

(2) 国学者と神道に関する研究

二十一世紀COEプログラム「神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成」の事業を直接的に継承した、

国学者と神道との関係についての研究を遂行するため、これまで国学関連人物データベースを構築する過程においてさまざまな形で国学者のデータ収集を進めてきた。本年度の研究事業では、すでに国学関連人物データベースに所載の人物のうち、『古学小伝』記載の国学者の三十人に焦点をあて、そのデータを充実させる。また、研究遂行にあたっては、日本文化研究所の研究事業である『國學院大學 国学研究プラットフォーム』の研究連携によって、情報交換などを密におこなう。

(3) 「慰霊と追悼」を中心とした日本人の靈魂観の研究

日本人の靈魂観を解明するため、慰霊と追悼の歴史の変遷とその意味を解明することを目的として、近代における慰霊の実態を把握するため、護国神社などの神道の慰霊施設の調査・研究を遂行する。また、定期的に「慰霊と追悼研究会」を開催し、学内外の研究者と共同研究を通じた情報交換をおこなうなど、より広い視野からの研究活動を進める。また、研究成果の出版に向けての執筆・編集作業をおこなう。

(4) 伝統文化リサーチセンター支援 文部科学省オープン・リサーチ・センター整備事業「モノと心に学ぶ伝統の知恵と実践」事業は本年度が最終年度である。引き続き日常的な研究マネジメント業務をおこなうとともに、最終年度に必要なさまざまな業務を遂行する(ORC事務局業務)。

(5) 神道・日本文化研究の国際比較と国内外の研究者間の連携強化

神道・日本文化研究における本学の学術的実績に基づき、ハーバード大学エドウィン・O・ライシャワー日本研究所ほかの海外研究機関、および国内の関連研究機関との研究交流を企画・推進する。

(6) 研究開発推進センター研究会 本事業のメンバーが中心的な役割を担い、本センターにおける日常的な成果をふまえた研究報告をおこなう研究会を、原則として月に二回開催する。本センターの研究事業を推進すると同時に、機構全体の横断的な研究会を目指す。

(7) 『研究開発推進センター研究紀要』の刊行

本事業における研究成果を発表するため、『研究開発推進センター研究紀要』第六号を刊行する。このほか、事業の成果については、ウェブサイト等でも公開することで、これまでに集積してきた神道・日本文化に関する資料を整理・把握し、これらを研究に活用することを通じて、本学の学術資産の公開・活用体制の整備をおこない、国際的に発信する。

(遠藤 潤)

二十一世紀研究教育計画委員会研究事業  
**「地域・渋谷から発信する  
 共存社会の構築」**

本研究事業は、これまで本学の人文・社会科学にまたがる多分野の研究者の参画を得て、研究開発推進センターのマネジメントにより実施されて来た「渋谷学」(代表・上山和雄)および「日本発・共存社会モデル構築による世界貢献(共存学)」(代表・古沢広祐)の二つの学際共同プロジェクトを統合し、國學院大學二十一世紀研究教育計画委員会による事業としておこなうものである。

「渋谷学」では、本学の所在地であり、大きな創造力と発信力を示す都市生活空間(渋谷)地域について、縦軸としての歴史の解明、横軸としての現状の理解に努めてきた。またそうした実績の積み上げと共に、その検討に基づき、将来における渋谷型まちづくり構想にも視線を伸ばしながら、本学による地域貢献のあり方を模索してきた。一方「共存学」では、本学の建学の精神にみる、自己の生命或いは共同体の「主体性」と、他者存在への「寛容性」「謙虚さ」を共に目指す学術理念を出発点としている。ここで「共存」とは、人間集団や、人間生活と自然環境等の関係性において、互いの存在を受容しながら多様性構築の可能性を保持する様態を指す。共存学ではこうした「共存」を主題に、持続的發展を可能とする社会モデルの抽出に向けた

検討を重ねてきた。

こうした多角的アプローチを可能とする具体的対象地域たる「渋谷」と、学際的な主題意識としての「共存」の、二つを焦点として進められるのが、本「地域・渋谷から発信する共存社会の構築」事業である。

研究遂行にあたっては、

- A. 神道・日本文化から考える
- B. 環境・経済活動から考える
- C. 地域・渋谷から考える

という3つの軸を設定し、これまでの共存学・渋谷学の研究成果を踏まえた活動をおこなう。そして、それらの活動をふまえて、今年度内に研究組織を新たな形態へと移行させる。

このために、本年度の研究推進として以下の取組みを計画している。

**共存学グループ**

共存学グループでは、国内地域社会(ローカル)、東アジア社会(リージョナル)、地球社会(グローバル)の3つの次元を設定し、「共存社会モデル」の核となる要素を抽出しようとして試みてきた。本年度は、上のA・Cの3つの視点からの考究として、それぞれ

(1) 神道・国学を出発点とする「共存社会の構築」に向かう思想的輪郭を描くこと

(2) 東アジア社会・地球社会についても、メンバーの研究成果を基礎として、環境や伝統・文化と人間生活の問題を検討し、その一員たる日

本から発信する「共存社会」への提言を模索すること

(3) 上記の検討・模索と共に、キーワード(「持続可能性」「多様性」「復興」「伝統」...)を選び、国内の複数地域に具体的フィールドを定めて、共存社会モデルの核となる要素を明らかにすることを実施する。

**渋谷学グループ**

渋谷学グループでは地域・渋谷を対象として都市社会のありようを多様な側面(歴史、地理、都市民俗、崇敬・信仰)から理解し、それを基礎として今後ありうる共存社会について明らかにする。

現在、渋谷区に住民登録をしている人は約二十万人である。昼間人口は夜間人口の二・七倍ほどである。ここには渋谷に居住していないが、勤務先あるいは通学先として渋谷に関わる人々が多く含まれている。わが國學院の関係者の多くはここに含まれる。これに加えて、駅の乗り換え利用者や買物客、観光客など、多くの人が一時的に渋谷を訪れる。

地域・渋谷の実態を理解するためには、このようにさまざまな形で渋谷に関わる人々の歴史と現状を明らかにする必要がある。

本グループでは、定住者を基本とした従来の地域理解モデルを越えて、さまざまなあり方で渋谷に関わる人々(渋谷を生きる人々、渋谷を生きた人々)の姿を捉え、共存社会構築の手がかりをつかむ。渋谷の

都市空間は歴史的にどのように形成されてきたのか、都市に生きる人々のきずなにはどのようなものがあるのか、経済活動から見た人々の関係はいかなるものか、神社をとりまく人々の結びつきやさまざまな信仰の実態はどうであるかなどの点について、歴史学、民俗学、神道学、宗教学、経済学などさまざまな学問分野からの研究を実施する。

**共通領域**

上記のグループごとの活動を基盤に、更に合同研究会議・合同研究会(年四回程度予定)をおこない、「神々と共存するまち(渋谷)」モデルと他の諸事例の、比較・検討や考察を進める。更に、こうした成果の発信の方途を模索し、本学の特色を生かした社会的貢献を追求してゆく。

(菅 浩二)

平成23年度 研究開発推進機構 事業計画及び人事一覧 (\*は責任担当者)

平成23年6月1日付

機関	研究事業名	専任教員	兼任教員	客員研究員	ポストドク研究員	研究補助員	外国人研究員	客員教授	共同研究員
日本文化研究所	デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開	平藤喜久子 星野靖二 塚田穂高	* 井上順孝 ヘイヴンズ,ノルマン 黒崎浩行 斉藤こずゑ	市川 収 フレール, チャールズ	市田雅崇 李 和珍 ガイタニデイス,ヤニス	今井信治		ナカイ,ケイト 土屋 博 星野英紀 山中 弘	チヨジック, マシュー キロス, イグナシオ 小堀馨子 シッケタンツ, エリック 高橋典史 ビュテル,ジャン=ミシェル 山梨有希子
	「國學院大學 国学研究プラットフォーム」の構築	* 遠藤 潤	松本久史		小林威朗	小田真裕		林 淳	一戸 渉 三ツ松誠
学術資料館	考古学資料館収蔵資料の再整理・修復・研究・公開	内川隆志 加藤里美 深澤太郎	* 吉田恵二 柳田康雄 青木 豊 谷口康浩	土屋健作					粕谷 崇 阿部常樹 依 寛司 伊藤博司
	出雲地域における祭祀遺跡に関する学術調査	内川隆志 加瀬直弥 加藤里美 深澤太郎	* 吉田恵二 笹生 衛 岡田莊司		舟木勇治				
	近代学術資産の資料化と地域連携活用に関する研究	内川隆志 加藤里美 加瀬直弥 深澤太郎	* 小川直之 黒崎浩行		田中秀典 齋藤しおり 新原佑典				
	神道祭祀の資料論的研究と関連資料の整理分析	加瀬直弥	* 笹生 衛 岡田莊司					山本信吉	
校史・学術資産研究センター	國學院大學における学術資産研究の発展と公開	齊藤智朗	* 阪本是丸 岡田莊司 千々和到 根岸茂夫 針本正行 松尾葦江	堀越祐一		畠山大二郎 山本岳史 清水正彦			
	國學院大學における大学アーカイブズと自校史教育の構築と展開	齊藤智朗	* 阪本是丸		宮部香織				
研究開発推進センター		遠藤 潤 齊藤智朗 菅 浩二 加瀬直弥 中野裕三 森 悟朗 宮本誉士 大東敬明	* 阪本是丸 太田直之 藤田大誠 中山 郁 松本久史 星野光樹	堀越祐一	上西 亘				柿島綾子 坂井久能 津田 勉 佐藤一伯 西高辻信宏 今泉宜子 大丸真美
	「日本発 共存社会モデル構築による世界貢献(共存学)」プロジェクト		* 古沢広祐		重村光輝	河原 亘 冬月 律			西俣先子 康 成文 野中規正
	「渋谷学」プロジェクト		* 上山和雄			手塚雄太 高久 舞			
	博物館学教育研究情報センター	伊藤慎二	* 青木 豊 落合知子 野中優子			(リサーチアシスタント) 小島有紀子 伊藤大祐			
伝統文化リサーチセンター	プロジェクト名	専任教員	兼任教員	客員研究員	ポストドク研究員	リサーチアシスタント	外国人研究員	客員教授	共同研究員
	祭祀遺跡に見るモノと心	内川隆志 加藤里美 深澤太郎	* 吉田恵二 小川直之 青木 豊 谷口康浩 笹生 衛 中村耕作	阿部昭典	加藤元康 石井 匠 新原佑典		高 慶秀	杉山林継 小林達雄 小林青樹 西本豊弘 ケイナー,サイモン 樂 豊實 松本岩雄 内山純蔵	中村 大 宮尾 亨 細谷 葵 佐々木雅裕 栗木 崇 錦田剛志 田中大輔 川口 潤
	神社祭礼に見るモノと心	加瀬直弥	* 茂木貞純 岡田莊司 茂木 栄 西岡和彦 太田直之 藤本頼生	池谷浩一 新木直安 山田岳晴	筒井 裕 鈴木聡子	伊東裕介		櫻井治男 藤澤 彰 牟禮 仁 沼部春友	佐藤一伯 岸川雅範 小島優子 横山直正 島田 潔
	國學院の学術資産に見るモノと心	遠藤 潤 齊藤智朗 大東敬明	* 武田秀章 大和博幸 阪本是丸 藤田大誠 松本久史		渡邊 卓 戸浪裕之 齋藤しおり 宮川博司		益井邦夫 秋元信英 三宅守常		
	伝統文化リサーチセンター資料館	内川隆志 加藤里美		上西 亘 眞田 芳彰 村松 洋介					

## 平成23年度 研究開発推進機構 人事一覧

平成23年6月1日付

機構長	阪本是丸
副機構長	井上順孝
教授(兼担)	青木豊 上山和雄 岡田莊司 小川直之 齊藤こずゑ 笹生衛 谷口康浩 千々和到 根岸茂夫 針本正行 古沢広祐 松尾葦江 柳田康雄 吉田恵二
准教授(専任)	内川隆志 遠藤潤 齊藤智朗 菅浩二 平藤喜久子
准教授(兼担)	太田直之 落合知子 黒崎浩行 中山郁 藤田大誠 ハイヴンズ, ノルマン 松本久史
講師(専任)	加瀬直弥 加藤里美
講師(特任)	中野裕三
助教(専任)	塚田穂高 深澤太郎 星野靖二 宮本誉士 森悟朗
助教(特任)	伊藤慎二 大東敬明
助教(兼担)	星野光樹
助手(兼担)	野中優子
客員研究員	市川収 土屋健作 フレーレ, チャールズ 堀越祐一
ポスドク研究員	市田雅崇 ガイタニデイス, ヤニス 上西亘 小林威朗 齋藤しおり 重村光輝 新原佑典 田中秀典 舟木勇治 宮部香織 李和珍
研究補助員	今井信治 小田真裕 河原亘 高久舞 手塚雄太 畠山大二郎 冬月律 清水正彦 山本岳史
リサーチアシスタント (博物館学教育研究情報センター)	小島有紀子 伊藤大祐
客員教授	ナカイ, ケイト 林淳 山本信吉 星野英紀 山中弘 土屋博
共同研究員	阿部常樹 一戸渉 伊藤博司 今泉宜子 柿島綾子 粕谷崇 キロス, イグナシオ 康成文 小堀馨子 坂井久能 佐藤一伯 シッケタンツ, エリック 大丸真美 高橋典史 チョジック, マシュー 津田勉 俵寛司 西高辻信宏 西俣先子 野中規正 ビュテル, ジャン = ミシェル 三ツ松誠 山梨有希子

## 平成23年度 伝統文化リサーチセンター 人事一覧

(文部科学省オープンリサーチセンター選定事業「モノと心に学ぶ伝統の知恵と実践」推進)

センター長	杉山林継
教授(兼担)	青木豊 大和博幸 岡田莊司 小川直之 阪本是丸 笹生衛 武田秀章 茂木栄 茂木貞純 吉田恵二
准教授(専任)	内川隆志 遠藤潤 齊藤智朗
准教授(兼担)	太田直之 谷口康浩 西岡和彦 藤田大誠 松本久史
講師(専任)	加瀬直弥 加藤里美
講師(兼担)	藤本頼生
助教(専任)	深澤太郎
助手(兼担)	中村耕作
客員研究員	阿部昭典 新木直安 池谷浩一 山田岳晴
ポスドク研究員	石井匠 加藤元康 齋藤しおり 新原佑典 鈴木聡子 筒井裕 戸浪裕之 渡邊卓 宮川博司
外国人研究員	高慶秀
リサーチアシスタント	伊東裕介
客員教授	秋元信英 内山純蔵 小林青樹 小林達雄 ケイナー, サイモン 櫻井治男 杉山林継 西本豊弘 沼部春友 藤澤彰 益井邦夫 松本岩雄 三宅守常 牟禮仁 礪豊實
共同研究員	川口潤 岸川雅範 栗木崇 小島優子 佐々木雅裕 佐藤一伯 島田潔 田中大輔 中村大 錦田剛志 細谷葵 宮尾亨 横山直正
伝統文化リサーチセンター資料館 嘱託学芸員	上西亘 眞田芳彰 村松洋介

## 【事務局】

学術メディアセンター事務部長	関秀二
学術メディアセンター事務部次長	古山悟由
研究開発推進機構事務課長	杉本久男
研究開発推進機構事務課	朝比奈友 藤田幸子 古越慶子 小平浩衣 須田佳代 小林信久 熱田匡紀 神山幸子
学術メディアセンター事務部主幹	堀内弘行

# 彙報

※伝統文化リサーチセンターの活動については『伝統文化のモノと心』(ニュースレター)、博物館学教育情報センターの活動については「高度博物館学教育プログラム」News Letter、ホームページなどを参照ください。

## 会議

### ○全体

- ・平成二十二年度第二回教員等資格審査委員会、平成二十三年二月十七日(木)十一時三十分～十一時五十分、若木タワー四階会議室○五
- ・平成二十二年度第三回人事委員会、平成二十三年二月十七日(木)十一時～十一時二十分、若木タワー四階会議室○五
- ・平成二十二年度第四回運営委員会、平成二十三年二月十七日(木)十三時～十三時二十分、若木タワー四階会議室○五
- ・平成二十二年度第五回企画委員会、平成二十三年三月九日(水)十一時～十一時五十分、AMC棟五階会議室○六
- ・平成二十三年度第一回企画委員会、平成二十三年四月二十日(水)十一時～十二時二十分、AMC棟五階会議室○六

- ・平成二十三年度第一回運営委員会、平成二十三年五月十二日(木)(持ち回り稟議)
- ・平成二十三年度第二回運営委員会、平成二十三年五月十八日(水)午前十一時～午前十一時三十分、若木タワー地下一階会議室○三
- ・平成二十三年度第一回人事委員会、平成二十三年五月十三日(金)(持ち回り稟議)
- ・平成二十三年度第一回教員等資格審査委員会、平成二十三年五月十八日(水)十時三十分～十時五十分、若木タワー地下一階会議室○三
- ・平成二十三年度 全員連絡会(中止)

### ○日本文化研究所

- ・平成二十二年度第六回日本文化研究所所員会議、平成二十三年三月二日(水)、AMC棟五階会議室○六
- ・平成二十三年度第一回日本文化研究所所員会議、平成二十三年四月十三日(水)、AMC棟五階会議室○六

### ○学術資料館

- ・平成二十三年度第一回学術資料館会議、平成二十三年四月十三日(水)、十一時五分～十一時四十五分、AMC棟五階プロジェクトルーム二

### ○研究開発推進センター

- ・平成二十三年度第一回研究開発推進センター会議、平成二十三年五月二十五日(水)十一時～十一時四十分、AMC棟五階会議室○六

- ・「建学の精神」の過去・現在・未来―私立大学の個性輝く教育とは―(共催)、平成二十三年二月十八日(金)十三時～十八時、AMC棟一階常磐松ホール、基調講演Ⅱ「私立大学の個性と『建学の精神』―過去から未来へ―」天野郁夫(東京大学名誉教授)、報告Ⅱ「建学の精神と大学改革」牧野富夫(日本大学常務理事・名誉教授)、「駒澤大学建学の理念考―学統は古い器に現今の構想を盛ることか―」池田魯参(駒澤大学仏教学部教授)、「主体性を保持した寛容性と謙虚さ―國學院大學建学の過去・現在・未来―」赤井益久(國學院大學教育開発推進機構長・文学部教授)、「上智(Sopha)とキリスト教人間学―他者のために、他者とともに―」大橋容一郎(上智大学文学部教授)、コメンテーターⅡ天野郁夫、司会Ⅱ中山郁(國學院大學教育開発推進機構)

## 公開講座・講演会・シンポジウム・関連学会

### ○校史・学術資産研究センター

- 「國學院の学術資産に見るモノと心」研究成果公開スペース見学会(解説 齊藤智朗)

### ○研究開発推進センター

- ・平成二十二年度第四回渋谷学研究会(一)「渋谷のコミュニティと神社祭礼」黒崎浩行(國學院大學神道文化学部准教授)、(二)「池袋と池袋駅」伊藤暢直(豊島区教育委員会学芸員)、平成二十三年二月五日(土)十四時～十七時三十分、AMC棟五階会議室○六
- ・第二回 國學院大學渋谷学シンポジウム「渋谷を描く」、平成二十三年二月十九日(土)十三時三十分～十七時、AMC棟一階常磐松ホール、「民俗から描く」長野隆之(國學院大學文学部准教授)、「文学から描く」服部比呂美(白根記念渋谷区郷土博物館・文学館学芸員)、「映画から描く」福谷修(映画「渋谷怪談」監督)、「写真から描く」佐藤豊(渋谷区在住カメラマン)、コメンテーターⅡ倉石忠彦(國學院大學文学部名誉教授)、田原裕子(國學院大學経済学部教授)、司会Ⅱ遠藤潤
- ・平成二十二年度第四回「共存学」公開研究会「転換期における日中関係の現状と課題―東アジア共同体は幻想か現実か―」、平成二十三年三月三日(木)十六時三十分～十八時三十分、AMC棟五階会議室○六、講師Ⅱ喬林生(南開大学日本研究院)、司会Ⅱ横山實(國學院大學法学部教授)、コメンテーターⅡ高橋克秀(國學院大學経済学部教授)
- ・渋谷学研究会公開講演会「渋谷のむかし」、講師Ⅱ平岩弓枝(作家)、平成二十三年五月二十一日(土)十四時～十五時三十分、AMC棟一

階常磐松ホール

・國學院大學研究開発推進機構 研究開発推進センター 関連研究会・科研費合同研究会「慰霊をめぐる人々とその空間」、平成二十三年五月二十八日(土) 十三時～十八時、共催・科学研究費補助金基盤研究(B)「戦争死者慰霊の関与と継承に関する国際比較研究」(研究代表者・西村明)、科学研究費補助金基盤研究(C)「帝都東京の神社境内と「公共空間」に関する基礎的研究」(研究代表者・藤田大誠)、AMC棟五階会議室〇六、司会〓中山郁(國學院大學教育開発推進機構准教授)、趣旨説明〓西村明(鹿児島大学法文学部准教授)、報告一「近代日本における慰霊の「公共空間」形成―靖國神社の祭祀と境内整備過程を中心に―」藤田大誠(國學院大學人間開発学部准教授)、報告二「環礁の悲しみ―マーシャル諸島を巡る日本人の「慰霊」グレッグ・ドボルザーク(一橋大学大学院法学研究科准教授)、報告三「(異郷の故郷)における慰霊祭の実践―沖縄県出身の旧南洋群島移民の活動を事例として―」飯高伸五(高知県立大学文化学部専任講師)

## 出張

### ○日本文化研究所

・平藤喜久子「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」プ

ロジエクトによる調査のため、鹿児島市内・天草、平成二十三年二月八日(火)～十一日(金)

・松本久史・遠藤潤・三ツ松誠・小林威朗・小田真裕「近代国学の靈魂観をめぐるテキストと実践の研究―霊祭・霊社・神葬祭―」プロジェクトによる調査のため、相馬市・南相馬市、平成二十三年三月九日(水)～十一日(金)

・井上順孝「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」プロジェクトによる調査のため、大阪市(関西学院大学)、平成二十三年二月二十五日(金)～二十六日(土)

・井上順孝「デジタル・ミュージアムの運営と関連分野への展開」プロジェクトによる調査のため、北九州市・熊本県玉名郡長洲町、平成二十三年三月十六日(水)～十八日(金)

### ○校史・学術資産研究センター

・堀越祐一「國學院大學の学術資産の研究と公開」プロジェクトによる調査のため、生島足島神社・長野県立歴史館、平成二十三年二月二十三日(水)～二十五日(金)

### ○学術資料館

・田中秀典「近代学術資産のデジタルデータ化・データベース化による再生活用の研究―柴田常恵拓本資料・宮地直一神社絵はがき資料を中心に―」プロジェクトによる調査のため、広島県広島市・廿日市市・呉市、平成二十三年二月五日(土)～

二月六日(日)

・田中秀典・新原佑典「近代学術資産のデジタルデータ化・データベース化による再生活用の研究―柴田常恵拓本資料・宮地直一神社絵はがき資料を中心に―」プロジェクトによる調査のため、佐賀県佐賀市・多久市、平成二十三年二月十四日(月)

・田中秀典「近代学術資産のデジタルデータ化・データベース化による再生活用の研究―柴田常恵拓本資料・宮地直一神社絵はがき資料を中心に―」プロジェクトによる調査のため、青森県青森市、平成二十三年二月十九日(土)

・田中秀典・新原佑典「近代学術資産のデジタルデータ化・データベース化による再生活用の研究―柴田常恵拓本資料・宮地直一神社絵はがき資料を中心に―」プロジェクトによる調査のため、鹿児島県鹿児島市、平成二十三年二月二十六日(土)

・齋藤しおり「近代学術資産のデジタルデータ化・データベース化による再生活用の研究―柴田常恵拓本資料・宮地直一神社絵はがき資料を中心に―」プロジェクトによる調査のため、鹿児島県福山市、平成二十三年三月三日(木)～五日(土)

### ○研究開発推進センター

・星野光樹・宮本誉士「鹿児島島の慰霊関係史料調査」、鹿児島県鹿児島市(鹿児島県立図書館・鹿児島県護国神社ほか)、平成二十三年三月五日(土)～七日(月)(星野)、三月六日(日)～八日(火)(宮本)

## 刊行物

### ○研究開発推進センター

・國學院大學研究開発推進センター 洪谷学研究会『洪谷学ブックレット 2 地元を「科学する」ということ 地域学の比較から考える』(平成二十三年二月二十八日発行)

・國學院大學研究開発推進センター 洪谷学研究会・上山和雄編著『國學院大學洪谷学叢書二 歴史のなかの洪谷―洪谷から江戸・東京へ―』(雄山閣、平成二十三年三月十日発行)

### ○学術資料館

・國學院大學研究開発推進機構学術資料館大形石棒プロジェクトチーム編『縄文時代の大形石棒 東日本地域の資料集と基礎研究 國學院大學研究開発推進機構学術資料館「考古学資料館収蔵資料の再整理・修復および基礎研究・公開」研究報告』(平成二十三年二月発行)

・國學院大學研究開発推進機構学術資料館編『柴田常恵拓本資料目録』(平成二十三年二月二十八日発行)

## 資料紹介 三角縁波文帯三神三獸鏡



ここに紹介する三角縁波文帯三神三獸鏡は、平成二十一(二〇〇九)年度の新収蔵資料である。収納されていた箱は本来二重箱であり、内箱は朱塗りであったと伝えられ、外箱には、「西漢僊人不老鑑 大槻氏」と墨書される。この大槻氏とは、仙台藩養賢堂学頭として活躍した大槻盤溪(一八〇一〜一八七八)であり、本鏡は、彼の旧蔵品として伝世してきたものである。「西漢僊人不老鑑」とは、西漢(前漢)時代の僊人(仙人)が使った不老鑑(鏡)という意味である。この名称は、松崎謙堂(一七七二〜一八四四)の『懺堂日記』天保八(一八三七)年四月十五日の条に「求古楼の古鏡 前漢仙人不老鑑 七寸二分。銘、吾作明竟甚大好。」云々とあり、求古楼、すなわち狩谷掖斎の旧蔵品である三角縁神獸鏡を含め九面の鏡を所有していたことが記されている。これらの鏡は、『千とせのためし』に図示されており、本鏡とは異なる鏡式の三角縁神獸鏡である。江戸時代後期にあって三角縁神獸鏡を「西漢僊人不老鑑」という名でよび慣わしていた好古趣味の世界が垣間見られ興味深い。

さて、本鏡にまつわる情報は、前述したとおり旧蔵者が大槻盤溪であること以外出土地などの基礎情報を欠いており、考古学的検証は困難と言わざるを得ない。しかしながら東京国立博物館に二面の同范鏡が収蔵されており、本鏡との関連性について触れてみたい。

### 三重県筒野古墳

三重県松阪市嬉野町一志町筒野に所在する全長三十九・五mの前方後円墳であり、古墳時代前期中葉の築造である。大正三(一九一四)年、後円部頂の粘土礫に被覆された木棺から三面の鏡と共に三角縁波文帯三神三獸鏡が出土し、東京帝室博物館に収蔵された。

### 岐阜県長塚古墳

岐阜県大垣市矢道町に所在する全長八十七メートルの前方後円墳であり、古墳時代前期後半の築造とされる。昭和四(一九二九)年、後円部頂の二基のうち東側の粘土礫に被覆された割竹形木棺から多数の副葬品とともに三角縁波文帯三神三獸鏡が出土し、東京帝室博物館に収蔵された。

平成二十一(二〇〇九)年十一月柳田康雄教授と筆者の二名で本鏡との同范関係を確認すべく東京国立博物館において熟覧をおこない、鈕孔、范傷、湯口等からほぼ三面の同范関係を確認することができたのである。細かな范傷の観察結果から製造の順序については、筒野古墳↓長塚古墳↓國學院大學蔵鏡となり、三面の中では本資料が最も保存状態が良好である。出土古墳に関する情報は皆無だが、同范鏡がいずれも古墳時代前期中頃から後半の伊勢湾周辺の盟主的古墳から出土していることから、当該地域との関連性が推定される。

(内川隆志)